

## 六波羅蜜と他力真宗

### 六波羅蜜

四諦と十二因縁を語つて来た私は、これから仏教の中心思想である、六波羅蜜はらみつについて味わつてゆきます。

四聖諦の教えは尊い。そして仏教の持つ思想信念を表す完全な表現ではありません。しかし苦、集、滅、道と表されたのでは、あまりに、自利的であつて、それではまだ利他的な世界が、はつきりしていません。そこで大乘菩薩道の思想は、もつと利他の世界のはつきりとした、六波羅蜜の思想と転回して来たのであります。

それでは六波羅蜜とは何であるか。

檀那波羅蜜 (布施)

尸羅波羅蜜 (持戒)

闍提波羅蜜 (忍辱)

毘梨耶波羅蜜 (精進)

禅那波羅蜜 (禅定)

般若波羅蜜 (智慧)

これを六波羅蜜又は六波羅蜜多といいます。

波羅蜜多とは、印度の原語、Pramita の音訳であつて、これを更に意味から訳しますと「到彼岸」と言われています。到彼岸とは「彼岸に到る」「彼の岸に到る」と読まれます。彼岸に対する言葉は此岸であります。此の岸とは、衆生の迷いの世界のことであり、彼岸とは、仏の世界即ち涅槃の悟の岸ということでもあります。そこで、迷の岸より悟の岸に到るには、何かによらなければなりません。その道、その船が即ち、さきに出した六波羅蜜であります。これによらねば絶対に彼岸に到ることは出来ないので、到彼岸というのであります。

そこでもつと簡単な訳はないかといいますと、この迷いの此の岸から悟の彼岸に到る、いわゆる生死の海を渡るのですから、波羅蜜を「度」と訳して、普通は六度といっています。即ち、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧を菩薩六度の行といつてあります。

釈尊一代の教は全て、如何にして生死の迷いを渡つて、仏の悟に入るのであるか。又仏の悟に一体に生きる者は、如何に生活すべきであるかを明らかにされたのであります。この菩薩六度の行は特にこの大乘仏教の真髄、一切の教法はこれにおさまるといつてもいいのであります。即ち仏教独特の教義なのであります。ですから如何なる経典にもこの六波羅蜜の出でいないものはありません。言いかえると菩薩行の骨格、仏教の骨組みでありまして、仏教である以上、何宗であろうともこの六度と無関係ではありません。この骨格に対する肉のつけ方、衣の様子がちがうことによつて各宗の別れがあるのだと思つて差し支えありません。四聖諦の教義は、更にこの六度の教義となつて大乘仏教の根幹がはつきりしたわけでありまして、これから六度についてお話しいたします。